

日本独文学会
秋季研究発表会

研究発表要旨集

2024年10月19日（土）・10月20日（日）

第1日 午後2時20分より

第2日 午前10時より

会場 熊本大学黒髪北地区

文法学部本館・文法学部B講義棟

〒860-8555 熊本市中央区黒髪2丁目40番1号

<https://www.kumamoto-u.ac.jp/campusjohou/access>

E-Mail: tagung2024kumamoto@jgg.jp

参加費

Peatixによる事前オンライン決済（10月11日まで）、もしくは当日払い
チケットページ <https://kumamoto2024.peatix.com/>

1. 研究発表会のみ

- ・常勤職の方：1,500円（事前オンライン決済）、2,000円（当日払い）
- ・それ以外の方：1,000円（事前オンライン決済）、1,500円（当日払い）

2. 研究発表会+懇親会

- ・常勤職の方：7,000円（事前オンライン決済）、8,000円（当日払い）
- ・それ以外の方：4,000円（事前オンライン決済）、5,000円（当日払い）

懇親会

※懇親会費のみの事前支払いはできません。

当日払いの方は、下記金額を受付にてお支払ください。

- ・常勤職の方：6,000円
- ・それ以外の方：3,500円

日本独文学会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-34-6 南大塚エースビル603

Tel./Fax: 03-5950-1147

E-Mail（メールフォーム）：<http://www.jgg.jp/mailform/buero>

発表者・発表会場一覧

2024年10月19日（土）

A会場 (A1講義室)	B会場 (B1講義室)	C会場 (A2講義室)	D会場 (A3講義室)	E会場 (B2講義室)	F会場 (受付付近)
シンポジウムⅠ	シンポジウムⅡ	口頭発表 (文学、文化、社会Ⅰ)	口頭発表 (文学、文化・社会Ⅱ)	口頭発表 (語学、ドイツ語教育Ⅰ)	ポスター発表
中東欧の見える境界、見えざる境界 14:30~17:30	ドイツ語のノモスと テシス 14:30~17:30	田中 一嘉 14:30~15:05	Manuel Kraus 14:30~15:05	作本 大祐 14:30~15:05	磯部 美穂 14:30~16:00 小林 大志 16:00~17:30 ※ポスターは期間中 掲示
		江口 大輔 15:10~15:45	栗山 次郎 15:10~15:45	Frank Nickel 15:05~15:40	
		進藤 良太 15:50~16:25	黒田 晴之 15:50~16:25	出島 恒太郎 15:40~16:15	
		田口 武史 16:30~17:05	渡辺 将尚 16:30~17:05	伊藤 港 16:20~16:55	
				成田 節 16:55~17:30	

懇親会 18:15~20:15

2024年10月20日（日）

A会場 (A1講義室)	B会場 (B1講義室)	C会場 (A2講義室)	D会場 (A3講義室)	E会場 (B2講義室)	F会場 (受付付近)
シンポジウムⅢ	シンポジウムⅣ	口頭発表 (文学、文化、社会Ⅲ)	口頭発表 (語学、ドイツ語教育Ⅱ)	ブース発表	ポスター発表
新感傷主義の可能性 10:00~13:00	トーマス・マン『魔 の山』 10:00~13:00	関口 裕昭 10:00~10:35	下村 恭太 10:00~10:35	ブース発表Ⅰ 金城ハウプトマン朱美 10:00~11:30 ブース発表Ⅱ 生駒美喜・小野寺 賢一 11:30~13:00	※ポスターは期間中 掲示
		高橋 慎也 10:40~11:15	藤縄 康弘 10:35~11:10		
		杵淵 博樹 11:20~11:55	信國 萌 11:10~11:45		
		馬場 大介 12:00~12:35	荻野 蔵平 11:50~12:25		
			Maria Gabriela Schmidt 12:25~13:00		

第1日 10月19日(土)

シンポジウム I (14:30~17:30)

A会場 (A1講義室)

中東欧の見える境界、見えざる境界
——求心力と遠心力のはざままで——

司会：井上 暁子

全体要旨

中東欧は、様々な言語が話され、境界がたえず変動し、そのたびごとに住民の強制移住やナショナリティの付け替えが行われた地域である。多様な民族、文化、言語が重層的に積み重なる境界地域では、複数の民族・文化・言語集団のはざまに生きる者や、「中間的アイデンティティ」をもつ者も少なくない。本シンポジウムでは、境界地域の人々が多様な境界と各々の時代にどう関わってきたか、現在どう関わっているかという問いを、文学と社会言語学の観点から論じる。

「国家」「国民／民族」「国語」を一枚岩に捉え、多様なものを束ねる動きを「求心力」、それを多方向に開く動き（たとえば翻訳など）を「遠心力」と呼ぶとすれば、中東欧では、この両者が絶えずせめぎ合う。なかでも境界地域は、政治、経済、文化の各方面に「求心力」と「遠心力」があり、ずれが生じやすい（井上 2020）。そのずれはどのような文学表現や、文化的実践を生んできたか。その「ずれ」を、定住者や特定の民族にとどまらない多様な個人や集団が共有することは可能か。どのような方法論を用いれば、建設的に議論しうるか。

本シンポジウムではこれらの問いを出発点に、「境界地域に残された多民族・多文化・多言語の痕跡を異化したり、現実とは異なる次元へ開いたりする作用は、物語の中では子供、よそ者、精霊などのまなざしに託され、現実レベルでは翻訳や異文化接触がその役割を担う」というテーゼをたて、「仲介」ないし「媒介」の作用がもたらす意義、方法論、将来的な可能性について、各フィールドから報告する。

本シンポジウムのテーマが隣接する研究分野のひとつが、1980年以降興隆してきた「想起の文化」（A.Assmann 2013）である。「想起の文化」は、これまでほとんど価値を見出されなかったり、過剰にナショナルな価値を付与されたりした物や場所に着眼し、ナショナル・ヒストリーを逆照射、もしくは脱構築した（Peter Oliver Loew 2006）。一義的に定義できないがゆえに「主体」化されにくく、ともすれば「想起される対象」にとどまるか、あるいは「想起に値しない」とみなされた集団に焦点を当て、彼らのオーラルヒストリーを「集団の記憶」へ書き込む試みは今日も続いているが、その一方で、「対抗モニュメント」など、想起の語りを固定化させる動きに抗うプロジェクトも存在する。

21世紀に入り「非＝場所」への関心と並行して、「固有の場所」に対する関心が回帰している（E.Rybicka 2014）。かつて境界地域に顕著だった多元性が見えづらくなる一方で、場所をめぐる記憶の語りを多方向に開くことは、依然課題であり続けている。本シンポジウムはそうした状況をふまえて、「求心力」と「遠心力」がせめぎ合う多層的な場としての価値を「境界」に見出し、「境界」がどのように媒介／仲介されるのかを考察する。

1. Günter Grass und die Kaschuben/-ei. Im Spiel mit dem Gegen-Gedächtnis

Miloslawa Borzyszkowska

Günter Grass (1927–2015) brachte mit *Die Blechtrommel* (1959) nicht nur die deutsche Literatur nach dem Zweiten Weltkrieg zurück auf die Weltbühne, sondern führte auch seine Heimatstadt Danzig und die Kaschubei in die Weltliteratur ein. Dabei praktizierte er Kunst als ein Medium des politischen, sozialen sowie interkulturellen Dialogs. Im Zeitraum angespannter deutsch-polnischer Beziehungen hat er in seinem explosiven Schaffen ein alternatives Narrativ angeboten, u.a. in Bezug auf die damals legitimen nationalen Erzählungen über die Vergangenheit des deutsch-polnischen Grenzraums. Dem Zeitgeist des „Eisernen Vorhangs“ in Europa widersetzte sich Grass mit der Integration nicht nur der weitgehend dichotomen nationalen Narrative, sondern auch der Erzählungen des 'Gegen-Gedächtnisses' (Michel Foucault) – der kaschubischen und der jüdischen. Mit seinem schrägen Blick drückte der Schriftsteller die kulturellen Verstrickungen multiperspektivisch aus und die Erfahrung einer Provinz gelang es ihm zum Universalen zu erheben.

Mit unterschiedlicher Stärke ist die kaschubische Motivik im ganzen Œuvre des deutschen Literaturnobelpreisträgers präsent. Was für ein literarisches Bild mit postnationalen Zügen und wie der „Meister sprachlicher Gestaltung“ entworfen, mit welchen Geschichten er subversiverweise damit den Raum gesättigt hat, steht im Blickfeld des vorgeschlagenen Referats. Hinterfragt wird auch, wie die Literatur zu emanzipatorischen Prozessen in der Region, die nach 1945 von Grenzverschiebungen und weitgehend vom „Bevölkerungsaustausch“ betroffen war, beiträgt.

2. ポーランド語圏における境界文学研究とその展開——シレジアの例を中心に

井上 暁子

第二次世界大戦後、国境線の移動によりドイツ東部領の一部はポーランド領に併合され、「ポーランド北部・西部国境地帯」と呼ばれた。中でもドイツ系住民の多かったシレジアは、住民構成や行政区分の変化による様々な「ずれ」や「境界」を抱えながら、社会主義イデオロギーを求心力とした文学生産の揺籃となる一方で、社会主義体制下の公的記憶からこぼれ落ちた記憶の貯蔵庫となった。1990年代には「ポーランド北部・西部国境地帯」全体で、地域に残された過去の痕跡を手がかりに地域の記憶を多角的に掘り起こし、地域の「マイクロストーリー」として保存しようとする動きが起こり、オルガ・トカルチュクやカロール・マリシェフスキら 1960年代この地に生まれた世代が、幼年期以来抱えてきた「故郷でありながら故郷でない」感覚について書き始めた。彼らの物語の中では、古い家や使い古された物がかつての住人と現在の住人をつなぎ、特定の場所が、彼らの知らない他者のドラマを「オルタナティブな現実」として語る。彼らの文学に見られる特徴は、ケネス・ホワイトの提唱した広範な研究領域「地詩学」の中でも、とくに場所の記憶と語りという観点から論じられる (Hillis Miller 1995)。本発表では、記憶の貯蔵庫として機能する「固有の場所」を介して築かれる対話的關係に遠心力の役割を見出し、現実性と幻想性をあわせもつ境界文学が何をなし得るかについて論じる。

3. ルーマニア領トランシルヴァニアにおけるナチズム受容と多民族共住の崩壊 ——エギナルト・シュラットナー『首を刎ねられた雄鶏』を踏まえて

藤田 恭子

オーストリア=ハンガリー二重帝国領であったトランシルヴァニアは、12世紀に移住を始めたドイ

ツ系住民に加え、ルーマニア系、ハンガリー系、ユダヤ系など多数の民族の共住地域である。しかし二重帝国解体後にルーマニア領となると、ドイツ系住民は「本国」のナチズムに同調していく。

本発表では、同地在住の作家エギナルト・シュラットナー(Eginald Schlattner, 1933-)の長編小説『首を刎ねられた雄鶏 Der geköpfte Hahn』(1998)を取り上げる。この小説では、小都市フォガラシュにある主人公の少年の家でドイツ語学校修了祝いのダンス・パーティーが開催される1944年8月23日の出来事を描きつつ、主人公の回想として、同地にナチズムが浸透し多民族の平和的共住が崩壊していく様子が示される。この日は、ヒトラーの同盟者アントネスク将軍がクーデターで排除され、直後にルーマニアがドイツへ宣戦布告した、いわばルーマニア・ドイツ人の「終わりの始まり」の日である。

シュラットナーは当該小説により注目を浴びたが、ヨーロッパでは伝記的側面に注目した議論に終始するか、各民族像などが検討されている。日本では本発表で初めて本格的に取り上げられる。

本発表では、優越を暗黙の前提として一言語が他の言語文化を「仲介」という二重帝国時代に端を発したイデオロギーの肥大化と破綻を見つめつつ、言語の「求心力」と「遠心力」がどのような言語表現を生み出しているか、またそこに生じる新たな「仲介」の可能性を考察する。

4. ドイツ語／ソルブ語地域の言語景観における二言語の創造的仲介とその意義

木村護郎 クリストフ

ドイツ語圏とスラヴ語圏の境界に位置する西スラヴ系のソルブ語は、ドイツ語の海に浮かぶスラヴの「島」としても、ドイツ語圏とスラヴ語圏を結ぶ「架け橋」、あるいは「窓」としても表象されてきた。しかし、その存在はしばしば地域の多数派にとって、不可視なもの、あるいは自分たちには関わりのないものとしてみられてきた。その理由は、ドイツ人の面前ではソルブ語を使わず、ドイツ語に切り替える「順応主義イデオロギー」にある。よってソルブ人は、ドイツ人と同じ地域に生活していながら、独自の世界を維持してきた。両民族の「求心力」がせめぎあう状況といえよう。そのような中で、ソルブ語が可視化されることで、共時的な「想起」を生み出すのが、公にみられる言語表示の総体としての言語景観である。公的な地名表記や官庁などではドイツ語とソルブ語の二言語表記が法律上規定されている。しかし、同一内容の二言語表記は、二つの言語世界が併存して交わらないことを前提としている。それに対して、本報告では、ソルブ語で独自の情報を提供する創造的な二言語使用がみられることを指摘し、この形態が、並行する二つの言語世界を乗り越える「遠心力」としていかなる意義をもつかを考察する。両言語の違いを活かした創造性の発揮は、これまでとりわけ文学作品において考察されてきたが、本報告は、文学における議論を現実世界と接続して提示する。

ドイツ語のノモスとテシス
——ドイツ語の「正しさ」と多様性——

司会：高橋 秀彰

全体要旨

言語はことば共同体内での使用の積み重ねを通じて慣習化されると、それはノモス（規範）として人々の言語意識に影響を及ぼすことになる。そうしたノモスが記述された体系はテシスとして、言語の「正しさ」の基準としての意味を持ち始めるのである。ここでいうノモスとテシスは、それぞれ慣習によって構築される *nomos* と人間の決定によって慎重に構築される *thesis* に由来し、それぞれ人間の行為（action）により創造される結果と、人間の構想（design）により創造される結果（Hayek 2013: 20）に対応している。本シンポジウムでは、ドイツ語のノモスとテシスの関係性に着目し、標準ドイツ語の成り立ちとその「正しさ」を説明することを目的とする。

ドイツ語で「正しさ」が公的に規定されているのは正書法だけである。それでは、文法や発音の規則は、ノモスとしてどのような意味を持つのだろうか。コーパス分析を行えば、変異形

（Variante）の出現頻度が得られるが、複数の形式が確認された場合には、どの形式が「正しい」用法となるのだろうか。量的研究だけで判断できない場合には、どのように「正しさ」を考えればいいのか。近代言語学では記述主義に則り、言語使用の「正しさ」の判断には関与しないことが慣例となっている。しかし、辞典類には言語研究をもとに実際の言語使用を記述しているだけであるとすれば、そこには規範性は存在しないのだろうか。こうした問題を各発表者が次の観点から考察する。

第1発表では、15世紀活版印刷術の発明は即手書き写本を排除したわけではなく、両者は共存し、新高ドイツ語二重母音化・単長母音化で印刷された聖書が手書き写本では中高ドイツ語の母音体系で表記されており、いわば現代ドイツ語正書法への発展に逆行していたことについて考察する。ドイツ語の標準化は、使用者の規範意識と密接に関係している。第2発表ではベートーヴェンの筆談帳の分析を通じて、19世紀のバイエルン・オーストリア方言圏における規範意識と言語使用の関係について考察する。現代ドイツ語発音の標準化の過程においては、国別の特徴にも配慮して記述されている。そうした記述の規範性について第3発表で考察する。テシスはノモスが徐々に成立した後に確立されることが多いが、ドイツ語圏で近年激しい議論を巻き起こしている *gender* の場合にはこのプロセスはあてはまらない。*gender* という極めて新しい言語変化ではテシスがノモスに先行しているきらいさえある。この問題について第4発表で考察する。以上の考察を通じて、テシスとノモスの関係性と、言語の「正しさ」について討論したい。

Hayek, F. A. (2013): *Law, legislation and liberty*. London & New York: Routledge.

1. メンテリーン聖書手書き写本における「旧表記」の「首尾一貫性」と「汎用性」

井出 万秀

現代に通じる、新高ドイツ語二重母音化・単長母音化を表記する「新表記」の浸透の一方で、中高ドイツ語の二重母音・単長母音を表記する「旧表記」が方言写本の中では、同一写本内での「首尾一貫性」と複数写本内での「汎用性」有していたこと、ひいては一定の「標準性」と「規範性」が認められることを、1466年に「アルザス」のメンテリーン印刷工房で「新表記」で出版された「メンテリーン聖書」から方言に書き写された写本における旧表記で実証する。

ドイツ語史研究では現代ドイツ語正書法の成立過程に関心が向けられ、標準とならなかった旧表

記に関心が向けられることはない。活版印刷が超地域的な売り上げ増大を狙って汎用性の高い表記になっていくのはドイツ語史研究における知られた事実であるが、活版印刷揺籃期に旧表記された手書き写本が並存していることと手書き写本における旧表記の体系性が見逃されがちである。このふたつの共存する潮流を「メンテリーン聖書」とその手書き写本が端的に示している。すでに14世紀に二重母音化が浸透しているはずの東部シュヴァーベン方言において、15世紀に比較的首尾一貫して旧表記が用いられていることは、活版印刷揺籃期、新表記の浸透が自然現象のように徐々に浸透したプロセスではなく、新旧表記の区別には一定の目的や意図があったことを示唆する。

2. 言語規範と言語使用——ベートーヴェンの筆談帳を資料として

佐藤 恵

本発表で言語資料とするのは、ベートーヴェン（Ludwig van Beethoven 1770-1827）がバイエルン・オーストリア方言圏のウィーンで使用した筆談帳（Konversationsheft 1818-1827：約60万語）である。ここにはベートーヴェンの他、家族、友人、学校教師、写譜者、家政婦等の発話の断片が記録されている。本発表では、社会的属性（職業・教育の程度等）と異形（Variante）選択との対応関係について考察する。初等教育しか受けていないと想定される話者には方言形の出現頻度が高く、綴りも規範的な正書法から逸脱したものが多い。一方、高等教育を受けた話者の場合には方言形はほぼ見られず、書きことば的な異形の使用が目立つ。本発表では特に、1816～1825年に寄宿制私立学校、ウィーン大学、工芸学校で学んだ甥カールの言語使用に焦点をあてる。筆談帳が記録するのは、マリア・テレジアとヨーゼフ2世統治下で教育制度が整備され、国語教育改革が推進された19世紀初頭のウィーンにおける言語使用だが、この時期に同地で中・高等教育を受けたカールは、東中部型標準ドイツ語の規範化を強く推進する政策が学校教育を通じてどのように実現されていたかを如実に観察できる格好の事例といえるからである。本発表では、カールが通った学校のカリキュラムや国語教科書の分析を通じ、当時の学校教育の中で媒介されたテシスが実際の言語使用にどのように、またどの程度反映されていたのかを確認し、そこで形成されるノモスの実態解明を試みる。

3. 収束と分散から生成されるドイツ語発音のノモスとテシス：「正しい」ドイツ語発音とは

高橋 秀彰

辞典編纂では、実際に使用されている「使用規範」（Gebrauchsnorm）をノモスとして抽出することが重要であるが、ひとたび出版されるとテシスとして著者の意図を超えた影響力を持ち、「正しい」発音として規範性を帯びてくる。記述主義を推し進めてきた結果、成文規範は多様化が進み、統一化を含意する「標準語」の意味も変遷している。

ノモスとテシスは表裏一体の関係にあり、ノモスがテシスの基盤となっていることからテシスはノモスの一部でありながら、テシスもノモスに影響を及ぼしている。つまり、ノモスはテシスを包含しているが、テシスがノモスを支配するわけではない。使用規範をノモスと考えた場合には、どのような模範話者を基準に考えるのか、またそこから得られる多様性をどのように成文規範に反映させるかという問題がある。さらに、こうした問題は、国や地域の変種の記述と組み合わせ考察しなければならない。ノモスは一定の条件下での言語行為において確認される収束の結果として生成されるが、実証調査の規模が拡大し、使用規範が分散すればテシスも大きく変容する。そのため、現在のドイツ語発音のテシスは収束と分散の間で揺れているといえよう。

本発表では、発音規範に注目しながらテシスとしての発音辞典等を分析し、ノモスの収束と分散の傾向を見出しながら現代の「正しい」ドイツ語発音とは何かを問い、その記述の可能性について考察したい。

4. Geschlechtergerechte Sprache? : gendern のノモス, テシス

田中 慎

本発表は、ドイツ語のしばしばもっとも新しい「言語変化」とされる gendern を題材に、ノモスとテシスの関係を問い直す。

言語学者は、通常、言語の「正しさ」については語らない。一方、ドイツ語圏でここ数年激しい議論を呼んでいる gendern の問題については、言語学者もなんらかの形で関わるのが求められている。しばしば取り上げられる問題には以下のようなものがある。

- ・男性形の総称的用法 (generisches Maskulinum) の問題
- ・性の可視化の必要性
- ・現在分詞による名詞化やジェンダースターによる性に関する中立表現について
- ・gendern 表現に対するドイツ語話者の反応

言語学は、少なくとも上の諸問題について建設的な議論のための (客観的) 材料を提示する役割を負う。本シンポジウムの言葉を用いるならば、言語学は「gendern 表現のノモスに基づいて、その規範の範囲 (規則や指針など) はいかにテシスとして提示されるべきか?」について回答を提示することができるのだろうか?

gendern を制度化するという事は、慣習からの規範 (ノモス) に基づかない言語の正さの基準 (テシス) が提案されることになるのであろうか。その場合、先行するテシスは、ノモスに影響を与えうるのだろうか? gendern の問題は、言語の記述と規範の問題に現在進行形で大きな課題をつきつけている。

口頭発表 : 文学、文化・社会 I (14:30~17:05)

C 会場 (A2 講義室)

司会 : 中島 大輔・平松 智久

1. デア・シュトリッカー『花咲く谷のダニエル』における恋愛要素の欠落について

田中 一嘉

13 世紀中葉の詩人デア・シュトリッカーは、宮廷文学から市民文学への転換期において、教訓詩、叙事文学、滑稽譚など多彩な作品を残している。本発表で扱う叙事詩『花咲く谷のダニエル (Daniel von dem Blühenden Tal)』はアーサー王伝説に取材した物語であるものの、主人公のダニエルはアーサー王伝説の正統な系譜には属さない特異な存在である。アーサー王関連作品に限らずシュトリッカー以前の伝統的な宮廷文学では、主人公 (英雄) の成長ないし立身出世において、宮廷風恋愛 (minne) の要素が必要不可欠であるにも関わらず、『ダニエル』には恋愛要素が欠落している。

先行研究では、ダニエルの立身出世における list (策略あるいは賢さ) が重視され、恋愛要素 (感情) は不必要であったとしばしば結論付けられている。本発表では、ダニエルに恋愛要素が欠落していることを明確にしつつ、その意義について文学史的観点から分析を試みる。

宮廷文学においてはロマン的・恋愛要素が大きな関心事であったのに対して、市民文学においては、例えば皮肉・諧謔に特化した作品、騎士の没落、道徳的荒廃に対する戒めなど現実主義的な主題の作品が次々と世に現れ、個々の作品に明確な主題・コンセプトが割り当てられる傾向が強い。本発表では、宮廷文学期における英雄譚の特徴、およびシュトリッカー以降の叙事文学の特徴を踏まえつつ、『ダニエル』における恋愛要素の欠落が、文学史上のトレンドにおいて恋愛モノと冒険モノとが分離し始めた一地点として捉え直すことを目的としている。

2. レッシング『ラオコーン』へのヘルダーによる応答

江口 大輔

ヘルダーの『彫塑』（1778）は、レッシング『ラオコーン』に対する応答としての性格をもつと言われる。レッシングが絵画と彫刻の差異を考慮に入れないのに対し、ヘルダーは視覚的芸術としての絵画と触覚的芸術としての彫刻を対比させ、彫刻に固有の価値を見出すのである。だが、『ラオコーン』への応答であるにもかかわらず、『彫塑』は記号理論的な考察を排除している。それはなぜか。本発表はこの問いに答える試みである。

初期の著作『第一の森』（1769）においてヘルダーは、触覚の根元性という『彫塑』での主要論点を先取りしつつ、『ラオコーン』第16章における記号理論の不十分さを強く批判し、独自の記号理論的考察を展開している。そこで核となるのは、言語がその「力（Kraft）」を通じて魂へ直接働きかける一方で、絵画や芸術は「作品（Werk）」を提示する、という対比である。ヘルダーの「力」概念は多様だが、Zumbusch（2017）が指摘する通り、『第一の森』での「力」は記号の意味作用とほぼ同義であり、ヘルダーが中心的に論じるのは記号としての言語の特性である。対して、絵画における色彩や形態についてその記号的性質が論じられることはほぼない。ヘルダーはここで、視覚芸術の表現手段には記号的性質が欠けているという認識を持つに至ったのではないか。そして『彫塑』においては、記号を介さない知覚としての視覚と触覚を比較しているのではないか。本発表では上記の仮説的テーゼをヘルダーのテキストに即して論証する。

3. ジャン・パウルと E. T. A. ホフマンにおけるフモールの相違について

進藤 良太

ジャン・パウル著『美学入門』においてフモールは、主観が現象を媒介として理念の把握および描出を試みる営み、またその所産を意味する。理念の現象化という困難を含むこの営みのうちで、一切の現象は理念とのコントラストによって滑稽化され、個々の現象は輪郭を失い、主観にとって感覚世界は理念の歪んだ反映という一個の総体と化す。狂気と紙一重のこの営みに歯止めをかけ、是正する能力として理性が措定されるが、しかしそれは主観を超えた、あたかも理念それ自体を見通すがごとき神的な認識能力である。

一方、E. T. A. ホフマンは『ブランビラ王女』において、主観、現象、理念というフモールの枠組みを共有しつつも、しかし神的な認識能力を人間に認めない。ゆえに「ウルダルの泉」に象徴されるフモールは理念をではなく、覗き込む者の主観と歪んだ感覚世界を映す水鏡であり、歪みは決して是正されない。同作品においてフモールの問題圏は、理念描出の希求よりむしろ主観の有限性、現象の畸形性の肯定にあり、その可能性は先に挙げた枠組みの外部、所産としてのフモールが他者に及ぼす作用のうちに求められる。『詩的想像力としてのフモール』において W. プライゼンダンツは、現象と理念、無限と有限の対立の弁証法的止揚の場としてフモールを捉え、その文学的系譜の上にホフマンを置いた。しかし、彼のフモールが真にこの対立を止揚しえるのか、再検討が試みられなければならない。

4. 身体運動が創り出す社会——J.C.F. グーツムーツから F.L. ヤーンへ

田口 武史

F.L. ヤーン（1778-1852）のトゥルネン（Turnen、いわゆるドイツ体操）は、ドイツにおける最初期の青年運動である。彼は解放戦争前後のプロイセンで、民主的でありながら結束力の高い統一ドイツを実現するために、民族性（Volkstum）の自覚を訴えた。これから建設されるべき国民国家の担い手は、独立独歩の個人でありながら献身的に社会に奉仕する者たちである—民族性に根差すそ

のエートスを、ヤーンは若者の集団的身体訓練をとおして醸成しようとした。

発想の源は、汎愛主義教育家 J.C.F.グーツムーツ（1759-1839）の開発したギムナスティク（Gymnastik、体育）にあるが、両者の身体観は正反対であった。すなわちグーツムーツが身体を部分や機能の集合と捉え、ギムナスティクをとおして個人の総合的完成を目指したのに対し、ヤーンは身体の全体性を前提に、民族性で個人（と共同体）を統べることをめざした。

もっともグーツムーツの科学的教育論を否定する意図は、ヤーンにはなかった。両者とも自由で公平な社会を期していたのであるが、前者が身体の生物学的共通性を根拠にその必然性を示唆したのを受け、後者はこれに歴史的・文化的共通性を付け加えた。コスモポリタニズムにナショナリズムが上塗りされたかたちである。ある民族に固有な普遍的人間像という論理矛盾は、トゥルネンの活動をとおして、近代ドイツ社会の構成原理となってゆく。

口頭発表：文学、文化・社会 II（14:30～17:05）

D会場（A3講義室）

司会：福元 圭太・葉柳 和則

1. „Ich hätte auch einen Blick auf Gottes Sterne werfen können [...]“. Astrologie, Esoterik und östliche Philosophie bei Robert Musil

Manuel Kraus

Ab den 1920er Jahren zeigt sich im Werk von Robert Musil ein zunehmendes Interesse für Astrologie, Esoterik und östliche Philosophie. Dennoch ist die Auseinandersetzung mit dieser Thematik in der einschlägigen Forschung ein noch immer vernachlässigtes Feld, wenn auch im Nachlass zahlreiche Hinweise zu finden sind, die Musils Interesse für diese Bereiche belegen. Auch die Pläne zu einem Buch über den Tierkreis, die Rezeption der Schriften Kuno von Hardenbergs oder Fritz Burgers sowie die Kategorisierung des menschlichen Charakters in *Der [Ein] Mensch ohne Charakter* (1927), die an die Unterteilung von Tieren in der chinesischen Enzyklopädie *Himmlischer Warenschatz wohlthätiger Erkenntnisse* erinnert, unterstreichen diese These. Musils Auseinandersetzung mit Astrologie, Esoterik sowie östlicher Philosophie gründet sich auf einer intellektuellen und philosophischen Rezeption östlicher Wertanschauungen, deren Weg sich über Hermann Graf Keyserlings *Schule der Weisheit*, die Übersetzungen Richard Wilhelms sowie C.G. Jungs Rezeption des *I Ging* bis tief in die Weimarer Republik hinein gut verfolgen lässt, wobei die Asienrezeption im Zusammenhang mit der astrologischen Komponente noch ein weißer Fleck in der Musilforschung ist und daher Gegenstand der Betrachtung in diesem Vortrag sein soll.

2. ハンナ・アーレントの『過去と未来の間で』第1章「伝統と近代」におけるニーチェの位置

栗山 次郎

ハンナ・アーレント（1906 - 1975）はドイツに生まれ、ユダヤ人迫害を逃れてアメリカに亡命し、『全体主義の起源』（1951年）で政治哲学者として専門家に、アイヒマン裁判の傍聴記『イェルサレムのアイヒマン』（1963年）で一般的にも知られるようになった。この間に『人間の条件』（1958年、ドイツ語版『活動的生』1967年）や政治的思考の練習と位置付けられる8編のエッセイ集『過去と未来の間で』（1961年、ドイツ語版1994年）が出版されており、この両著作においてニーチェの名前は度々出ている。

アーレントについては多く語られており、それらの中でニーチェの名前は時折言及されてはいるが、ニーチェのどの論点がどのように判断されているかについてはあまり論じられていない。

『過去と未来の間で』第1章「伝統と近代」ではキエルケゴールとマルクスとニーチェが近代の伝統的ヒエラルヒー秩序を意識的に突然ゆすぶってしまった、と位置づけている。この発表では、アーレントがニーチェのどの主張をもって伝統的ヒエラルヒーを跳躍しようとしたと観ているのか、その跳躍自体の成否をどのように判断しているのかについて概観する。そのうえで、このニーチェ評価から一方ではアーレントの『活動的生』でのニーチェ解釈を深化させることができる点を、他方ではこのニーチェ評価により一般的なニーチェ論の進化へ寄与できる点を述べる。

3. エトガー・ヒルゼンラート『夜』——あるホロコースト小説の通俗性について

黒田 晴之

当時ルーマニアに属していたブコヴィナのユダヤ人は、第2次大戦時にナチによってトランスニストリアに移送され、多くの者が強制労働に従事させられた。このときの体験に基づく文学作品のなかで、ドイツ語で書かれた詩については、日本でもすでに相当の研究蓄積がある（藤田恭子2014）。ただしそれ以外のものとなると、使用言語がヘブライ語や英語に跨がっているなどの理由のため、さほど知られているとは言いがたい（小説家のアハロン・アッペルフエルド、詩人のダン・パギス、画家で戦時中の日記も出版したダガーニなど）。ちなみにツェランもブコヴィナの出身だが、トランスニストリアには移送されていない。

本発表ではエトガー・ヒルゼンラート（Edgar Hilsenrath, 1926–2018）の小説『夜』（Nacht）を取り上げる。かれもトランスニストリアに移送されたユダヤ人の1人で、『夜』にはそのときのゲットー体験が反映されている。

ヒルゼンラートと言えば、第1作『夜』と第2作『ナチと理髪師』（Der Nazi & der Friseur）の出版や評価が、当初は順調ではなかったということが話題になる。『夜』の初版（1964）は限られた部数しか発行されず、出版社も販促らしいことをしなかった。この小説がようやく注目されはじめたのは、別の出版社から1978年に新版が出てからのことだった。『ナチと理髪師』にいたっては、英語訳・イタリア語訳・フランス語訳の出版が先行し（英訳は1971年）、ドイツ語版がついに出版されたのは1977年であった。前者はゲットー内でのユダヤ人同士の生存をめぐる闘いを描いている。後者はユダヤ人（幼なじみも含む）を虐殺したSSの主人公が、戦後はその幼なじみになりすましてパレスチナに渡り、こんどは建国を目指すユダヤ人武装組織に入隊して、イギリス軍やアラブ人相手に闘うという内容である。こうした内容にドイツの出版社の多くが尻込みした。「過去の克服」の文脈で言えば、当時のドイツが少なくとも公的には取っていた、「親ユダヤ主義」的な姿勢を揺るがすこととなり、これを指摘する新聞・雑誌等の記事も見かける（以上については Patricia Vahsen 2008 の総括的研究がある）。

ただしヒルゼンラートやその作品を扱った研究は、少しずつ出てきたとはいえ（Helmut Braun のものなど）、本格的なものはまだまだ少ない。これはかれがブコヴィナ～トランスニストリアにいたのが、1938年から1944年までの10歳代の数年間で、ブコヴィナの文学サークルとは基本的に関係がなく、ドイツに最終的に戻ってきたのが1975年だったので、戦後のドイツ文学界とは関係が薄かったという事情にもよる。

『夜』はホロコースト小説のなかでもきわめて特異だ。ナチのドイツ人がまったく登場せず、ゲットー内での壮絶な生存が描かれるので、ユダヤ人が犠牲者だけでなく加害者にもなる。こうしたホロコーストのリアルを描くにあたり、ヒルゼンラートは通俗的な内容・文体を選んだという仮説から、具体的なテキストに即してこの小説を検討してみたい。

（※この小説のもっている性格上、暴力的・性的な内容も扱うことを、あらかじめ念のため申し添えます。）

4. 再統一直後の時期における、オットー・エルンスト・レーマーのホロコースト否定論について

渡辺 将尚

ナチ政権下において陸軍軍人であったオットー・エルンスト・レーマー(1912-97)は、戦後の西独でもナチ主義者としてしばしば物議をかもしていた人物であるが、本発表で注目したいのはむしろ再統一後のレーマーである。彼は 1991 年から 93 年まで、小新聞『レーマー急報』を発行していたが、ここで取り上げられていたテーマは、ガス室もユダヤ人の大量虐殺もなかったという、ホロコースト否定論なのである。再統一後の時期に突然否定論を展開し始めたのはなぜなのだろうか。

この変化の第一段階は再統一前にすでに用意されていた。1981 年の彼の著作『ヒトラーをめぐる裏切りと反逆』である。ここでレーマーは、1939 年 10 月のヒトラー演説を引用しているが、引用されているのは英米へ和平提案をしている部分のみで、それが受け容れられなければ新たな闘いも辞さないという強硬姿勢を見せている部分は見事に削除されている。この著作で示されているヒトラーは、平和主義を掲げる穏健な統治者であり、同時に敗北者である。この時点で彼のヒトラー崇拝にはすでに綻びが生じていると言えるが、東西冷戦下では、このことはレーマーにとって特にそれ以上の変化をもたらすものではなかったと発表者は考える。

彼に決定的な変化をもたらしたのは再統一である。この出来事はレーマーにとって、ドイツが敗戦国であり、戦争犯罪を犯した国家であるという事実を再度確認を迫るものであった。しかしレーマーに特徴的なのは、それを敵一彼にとっての「敵」は相変わらずユダヤ人である一による攻撃と解釈する点にある。発表では、1. この攻撃は戦争であり、今度こそ勝利しなければならないと認識されていたこと、2. その反撃の手段として用いられたのがホロコースト否定であったこと、以上 2 点の論証を試みたい。

口頭発表：語学、ドイツ語教育 I (14:30~17:30)

E 会場 (B2 講義室)

司会：嶋崎 啓・下寄 正利

1. アルザス語の不定冠詞と共起する[n]の生起要因に関する考察

作本 大祐

アルザス語 (本発表はアレマン語域を扱う) では、不定冠詞/a/へ 1 開音節の機能語が先行すると歯茎鼻音[n]が生起する場合がある (z.B. so-n-e ,so ein(e)'; wie-n-e ,wie ein(e)'). この現象についてはこれまで、不定冠詞が音声上通時的に失った/n/が母音連続で再び実現される音交替とみなす立場 (Ortmann 1998) と、母音連続を回避する方策のひとつである音挿入とみなす立場 (柴崎 2012) があり、本発表は後者を支持するものである。音交替説では、so (*-n-) oder so のようにあらゆる 2 語間の母音連続で[n]がみとめられるわけではないことのほか、現代標準ドイツ語の口語形態では so eine の縮約形にあたる so 'ne の存在 (Wiese 1996) が念頭に置かれており、特にアルザス語の so-n-e は語彙的な/n/の残存例とみなされうる。しかし、Ortmann(1998) 自身も触れているように、[n]をはじめとする舌頂音は喉頭音と並んで無標な挿入分節音として広くみとめられるほか、とりわけ舌頂音の挿入には通言語的に形態統語的制約が伴うことが多い (Žygis 2010)。また、口語ドイツ語における so 'ne は後続不定冠詞の文法性が女性である場合のみ現れる形式であるが、アルザス語の不定冠詞は主格・対格において文法性に関わらず/a/であり、アルザス語の so-n-e はいずれの性においても実現されるという違いなどもみられる。一見些末に映る、分節音ひとつをめぐる生起要因の検討は、アルザス語の記述のみならず、最適性理論 (Prince & Smolensky 1993/2002) の枠組みを用いた制約階層の仮定にも影響を及ぼす。

2. Beeinflussen die Normen der Deutschlehrenden die Selbstüberzeugungen der Studierenden?

Frank Nickel

Was denken meine Studierenden über sich und ihre Fähigkeiten? Beeinflusst mein Bewertungsstil ihre Ergebnisse?

In den letzten 50 Jahren konnten Forschende wiederholt nachweisen, dass ein starkes Vertrauen in die eigenen Fähigkeiten und ein positives Konzept von sich selbst dazu führen, dass sich Studierende anspruchsvolle, aber erreichbare akademische Ziele setzen, sich in Prüfungssituationen weniger ängstlich fühlen, mehr Freude an ihrer akademischen Arbeit haben und länger an schwierigen Aufgaben bleiben (zuletzt: Bong / Skaalvik, 2003). Seit 25 Jahren gibt es zudem eine Vielzahl von Befunden, die belegen, dass eine individuelle Beurteilung durch Lehrende günstigere Auswirkungen auf die Motivation der Lernenden haben als eine Leistungsbeurteilung, die Leistungen miteinander vergleicht (Mischo / Rheinberg, 1995; Rheinberg, 2001; Dickhäuser, et al. 2017).

Mein Forschungsziel war es, den Einfluss von Selbstkonzept, Selbstwirksamkeit der Studierenden und Bezugsnormorientierung der/des Lehrenden auf die Lernmotivation von Studierenden in Japan zu untersuchen. Die Ergebnisse weisen auf einen Zusammenhang hin und verdeutlichen das Zusammenspiel zwischen individuellen Wahrnehmungen und externen Erwartungen in Sprachlernkontexten. Die Daten zeigen, wie wichtig es ist, die Lernenden und die Dynamik der Lehrkräfte zu verstehen, um einen erfolgreichen Spracherwerb zu fördern.

3. ドイツ語の助数詞の機能の再検討

出島 恒太郎

下記のドイツ語の助数詞構文の例は、形容詞が伴う場合多くは助数詞に前置する。

(1) Das war **ein hartes Stück Arbeit**.

本発表はドイツ語の助数詞構文がただ「数える」機能だけではなく (vgl. Krifka 1989; Zifonun 2010; Murelli 2017)、主要部名詞に対する「修飾」の機能を有することになったことを主張する。このことは、助数詞構文の形態・統語・意味的な特徴を、共起する形容詞の振る舞いなどに着目しながら、以下の5つの点から導かれる:

1. 上位の助数詞構文スキーマからの実現形の一つである (1) の例は修飾)の機能が実行される構文である。
2. 修飾の機能は **Stück** の意味のネットワークより派生される。
3. **Stück** の意味のネットワークは、縮小辞 (**Diminutiv**) などが持つ意味・語用論的ネットワークと類似する機能の分布が観察される。
4. 修飾機能を示す用例の出現によって文法変化が生じ、統語構造が変化した結果、元々とは異なる構造 (修飾構造) も示すようになった。
5. この修飾構造は、その他の修飾構造から形と意味の両側面で動機付けを与えられている。すなわち構文ネットワークを成している。

先行研究では、助数詞構文に二種類の構造を仮定している (vgl. Krifka 1989; Yoshida 2006)。量化機能の実行、すなわち (2i),(3a) の構造分析に重きが置かれ、助数詞構文は名詞量化領域 (**Nominale Quantifikation**) に属する現象であることが強調されてきた (vgl. Koptjevskaja-Tamm 2002; Zifonun 2010; Murelli 2017)。

- (2) i) [Numerale+NKL]+Nomen
 ii) Numerale+[NKL+Nomen]
 (3) a. [_{NPI} [_{OP} [_O drei] [_N Pfund]] [_{NPI} Äpfel]]
 b. [_{QP} drei [_O (+N) [_O Stück] [_{NP} Obst]]] (Yoshida 2006: 37 (筆者下線))

しかしながら構造が異なれば構文の意味も異なることが予想される。そのため、例えば (2ii) のような(2i)とは異なる構造を示す助数詞構文に関しても検討するのが本発表の目的である。

例えば(2i)とは異なる構造分析が可能であることを示すよう傍証には次のようなものがある。Zifonun (2010)は修飾機能の分類に対応して複数の形容詞は(4)のような語順になると示す (Zifonun 2010: 126 =(4))。Murelli (2017: 1715)は形容詞の種別に依存して、助数詞に対して前置されるか、後置されるかで容認性が異なることを示す(5), (6)。

- (4) die dortigen vier alten königlichen (Paläste)
diskurs-ref. Lokalisierend quantifikativ qualitativ klassifikatorisch (Nomination)
 (5) zwei dünne/*druckgeeignete Blatt Papier
 (6) eine Tasse guter/italienischer Kaffee

形容詞の修飾要素を含むドイツ語の名詞句内の語順には「双中心的 („plurizentrisch“)」特徴があり、限定詞と名詞がそれぞれ主要部を成していると考えられている(vgl. Eichinger 1991; 1993)。DWDSにおいて Stück Arbeit の連続に形容詞が伴う場合、形容詞は助数詞に前置する位置に多く現れていることが分かる。これは助数詞が修飾機能を果たしていることを示唆する証拠となる。

4. 不在構文が持つ「不在性」とは？——場所表示と語用論的推論に焦点を当てて

伊藤 港

不在構文は〈sein+不定詞〉の形式をしており、一般的に de Groot (2000), Vogel (2007)以来、主語の人物が話題の中心地を不在にしていると主張されている。しかしながら、本発表では以下の2つのテーゼから不在構文は不在性を内包しているわけではなく、場所表示機能とグラウンド機能を持っていると考え、不在性は語用論的推論から生じるものだと主張する。

テーゼ1：不在構文の中心義は、不在性ではない。

上記の形式であっても不在性を表さない例文が、コーパスでは観察できる。

- (1) Der damals 17-jährige Trayvon **war einkaufen**, als er von George Zimmerman, Mitglied einer Bürgerwehr, erschossen wurde. (Die Zeit, 20.07.2013 (online))

例(1)の場合、この構文は不在の意味ではなく、場所表示とグラウンド機能を有している。グラウンドはトレイボンが買い物中だったこと、フィギュアは彼が打たれたことである。また〈sein+beim+不定詞〉から成る beim 構文も不在構文同様に、話題の中心地に主語の人物がいないことは示すことが可能で、不在の意味は不在構文だけが持っているわけではないのである。

- (2) Er ist einkaufen.

例(2)は、先行研究で多く扱われている典型的な例であり、Wo ist er?の回答して使用されていること、in der Stadt のような場所句を挿入可能なため、不在構文では場所表現も可能であると考えられる。

テーゼ2：不在構文における不在性は推論から生まれる。

では、なぜこの構文が不在性も表すことができるのか？これは、不在性グレード(強弱)をこの構文が表現できるからである。新グライス派の Horn (1984)の話し手指向である R 原理(必要とされるだけの貢献をせよ、必要以上のことを言うな)に倣うと、例(2)の場合、聞き手が「彼は買い物だから、ここにはいない。」と推論しているため、強い不在性が生じることがわかる。それに対して(1)の場合、聞き手は不在性についての推論をしていない、つまり不在性は弱い。

この構文における議論の中心は、不在性が何に起因しているかである (Fortmann/Wöllstein 2013)。先行研究では、gegangen が省略されているという考え (Er ist arbeiten (gegangen.))、構文

文法的意味があると主張 (König 2009) 、Er ist (in der Stadt) einkaufen.のように場所規定句のスロットがあるため場所句が挿入可能であり、推論として不在の意味が生み出されるという考え (Abraham 2008, Fortmann/Wöllstein 2013) などの説明が試みられてきた。しかし、不在の意味を持たない〈sein+不定詞〉の形式、不在性を導く詳細な推論までは考えられてこなかったため、以上のことを本発表では論じる。

5. ドイツ語の受動文は事柄をどのように捉えるのか——コーパス調査に基づく考察 成田 節

「A の行為が B に及ぶ」ことをドイツ語で他動詞を用いて表す場合、A を主語とする能動文でも、B を主語とする受動文でも表すことができるが、日本語と比べると「田辺家に拾われる前は、毎日台所で眠っていた。」(吉本ばなな「キッチン」)に対する Bevor mich die Tanabes aufgelesen haben, schlief ich nachts immer in der Küche. (Wolfgang Schlecht 訳) のように、受動文が期待されるケースで能動文が選択されることも少なくない。ドイツ語の受動文選択の要因として動作主表示の非必須性とも関連する情報構造上の利点なども挙げられるが、ここでは werden 受動文による事態把握という観点から受動文選択の一つの要因を考察する。

先行研究には、能動文の「動作者が被動者に働きかける」という他動詞的な事態把握に対し、受動文では「被動者がどうなるのか」という自動詞的な事態把握に近づき、たとえ動作主が表示されても、動作主による働きかけ(あるいは動作主の有責性)という側面は弱まるという指摘が見られる。つまり「被動者が動作者から影響を被る」ことを表すにはドイツ語では受動文よりも能動文が適しているということになる。他方、日本語では「被動者が動作者に～される」という被影響の表現が受動文の中心を成すという指摘(志波 2022)があり、この点で日本語とドイツ語の受動文の事態把握の仕方は異なると考えられる。本発表では、loben, beleidigen, verletzen など「人の人に対する行為」を表す他動詞の能動文と受動文の分布を調査し、適宜日本語とも比較しながら、ドイツ語受動文の事態把握の一側面を明らかにしたい。

ポスター発表 I (14:30~16:00)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

F 会場 (受付付近)

言語学習と機械翻訳——ドイツ語学習者の機械翻訳使用実態に関する調査報告

磯部 美穂

本発表では、2023年に日本人ドイツ語学習者を対象に実施した機械翻訳の使用実態調査の結果を報告する。2020年以降オンラインでの学習習慣が拡大し、それに伴うデジタル技術の普及が、言語学習者に翻訳ツールの利用を促した。ドイツ語教育の現場においても、安易に翻訳ツールを利用する学習者が増加し、機械翻訳の存在は看過できない状況となっている。それゆえ、ドイツ語学習における機械翻訳の応用方法を検討していくことは喫緊の課題であるといえる。

言語学習と機械翻訳の有用性に関しては、英語教育の領域において研究が進められてきた(Nino 2009; 柳瀬 2023)。近年、英語以外の機械翻訳も普及し、高い精度の翻訳ツールが利用できるようになったことから、ドイツ語教育の領域においても、言語学習と機械翻訳に関する議論がおこなわれている(Koizumi-Reithofer / Waychert 2023)。

本研究では、機械翻訳の学習上の有用性を検証するため、まずは日本国内の高等教育機関でドイツ語を学ぶ学習者に協力を依頼し、機械翻訳の使用実態に関する調査をおこなった。調査において

は、使用頻度と目的、使用時の感情（依存感、快感、恥、自信、罪悪感）の質問項目を設定し、学習目的（読む・書く課題）別の機械翻訳に対する信頼性について回答を求めた。調査結果として、回答が得られた学習者67名全員が「使用経験がある」と回答し、学習目的別に機械翻訳の信頼性が異なることを確認した。この信頼性の相違と自由記述の内容を基に、学習者が抱く機械翻訳に対する印象や使用実態を明らかにし、機械翻訳を学習効果的に利用するための知識や方法を考察する。

ポスター発表Ⅱ (16:00～17:30)
(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

F 会場 (受付付近)

学習者による文法説明動画の作成活動
——行動志向・タスク志向の授業における文法知識の明示化

小林 大志

行動志向・タスク志向の授業では学習者による目標言語での現実的言語活動が重視される。文法知識の明示的説明を聞いたり読んだりすることはそれ自体として目標言語による言語活動ではないため、そうした授業では、文法は説明されるのではなく、言語活動を通じた暗示的な習得が図られる。一方、日本の大学では、専門課程で文献講読を行う可能性のある文系学生を中心に、明示的知識としての文法学習への要請も強い。その点で、行動志向・タスク志向の授業でも文法知識の明示化を図ることには意味があるが、その方法は、それ自体としても現実的な言語活動であることが望ましい。

本発表は、発表者が実施している学習者による文法説明動画の作成活動について報告する。当該の授業では、教員による文法の説明を行わず、代わりに、学習者が自分たちで任意の言語（日本語、英語、ドイツ語）で文法を説明する動画を作成している。動画がドイツ語で作成される場合、文法知識を明示化する現実的言語活動となる。こうした活動は Rösler & Würffel (2020) (=DLL5) でも紹介されているが、日本の大学での実践例はおそらくなく、その効果は知られていなかった。本発表では、実際に学習者が作成した動画から窺える理解度・学習意欲・取り組みの様子から、文法動画作成が文法知識の明示化を図る有効な手段となり得ることを示す。

第2日 10月20日(日)

シンポジウム III (10:00~13:00)

A会場 (A1講義室)

ノイモ・エンプfindsamkeit
新感傷主義の可能性

——1800年前後のドイツにおける手紙文化——

司会：益 敏郎

全体要旨

ミラン・クンデラは小説『不滅』(1990)のなかで、ベッティーナとゲーテの関係に関心を寄せ、興味深い考察を行っている。二人の関係は、偉大な詩人と純真な娘の奇跡的な愛の邂逅などではなく、ゲーテを「不滅の詩人」に仕立てあげたいベッティーナと、それを望まないゲーテの滑稽な遁走劇であり、ベッティーナはゲーテの死後、愛の証と称する『ゲーテとある子どもの往復書簡』を編集、出版することで、(ゲーテの意に反した)「不滅」を打ち立てたのだ。そしてクンデラは、ベッティーナを範例に、より強く、より深く、より激しい感情を自他から求めてやまない人間、絶対的的自我から絶対的世界へと飛躍する不滅への欲望を持つ人間を、「ホモ・センチメンタリス」と名付け、西洋の「理性的人間」に随伴し続けてきた形象として提示した。

このクンデラの思考は、18世紀に現出した手紙文化を、近代的コミュニケーション空間の雛形と捉えつつ、そこで生まれたメディア論的感性を精確に射抜いている。ベッティーナはゲーテに宛てた手紙において、神のごとき「作者」に心酔する感傷的な「女性読者」を演じつつ、一方でその編集、出版行為によって、匿名であったはずの「女性読者」の立場で「作者」を主体的に創造した。ここには今まで見落とされてきた、感情、メディア、文学をめぐる新しい関係が刻み込まれているのだ。

本シンポジウムはクンデラの試みを一つの模範として、1800年前後のドイツにおける手紙文化と文学、感情の関係を問い直す。そして19、20世紀に向けて展開するヨーロッパ感情文化を捉えるための、「新感傷主義」(Neue Empfindsamkeit)という実験的枠組みを提唱するだろう。18世紀中葉に限定される狭義の「感傷主義」については、システム理論や社会史研究の流れを受けて、従来の非理性的で柔弱な文化傾向という否定的評価を脱し、市民社会や啓蒙主義の展開の一環として捉えられるようになってきている(Aurnhammer u. a. 2004)。本シンポジウムは、その領野を1800年前後からそれ以降にまで拡張する試みともなるだろう。その点で注目すべきは、手紙と近代的主観性の関係をめぐる研究(Bohrer 1987)、書簡体小説のジャンル論的研究(Stiening u. Vellusig 2012)だが、そこに深く関わるはずの感情文化はほとんど無視されている。こうした状況は、歴史学や脳神経学において感情が新領域と見なされ、人間関係や日常コミュニケーションの地平で「センシティブさ」を増している現代社会において、文学研究が感情文化を新しく捉え直すための枠組みが、なおも欠けているということではないか。

本シンポジウムは以上の問題意識を持って、ヘルダーリンとズゼッテ・ゴンタルトの運命的愛の手紙、ノヴァーリスにおける手紙と文学理論、ブレンターノの書簡体小説『ゴドヴィ』における宗教と感情、ゲーテの『遍歴時代』における手紙と社会的感情、ベッティーナの書簡メディアと愛の関係をテーマとする各発表を行う。

1. すれ違う二人のホモ・センチメンタリス ——あるいはヘルダーリンとズゼットの書簡効果について

益 敏郎

ヘルダーリンとズゼット・ゴントルトの「運命的」関係は、もっぱらヘルダーリンが自らの理想に従って創造した詩的女神ディオティーマを中心に考察されてきた。しかし二人の手紙を、とくにズゼットの手紙を、18世紀以来の感情文化的背景を踏まえて読み直すと、二人の関係が別様の意味を持って浮かび上がってくる。ズゼットは、ヘルダーリンの詩的女神と自己同一化する身振りを見せる一方で、18世紀の書簡体文学の発明した「感傷的」技巧をふんだんに用いて、ヘルダーリンを市民的、感傷主義的圏域に呪縛しようとする遊戯を、ほとんど命がけで仕掛けていた。その感傷的な手紙は、二人の愛が運命的かつ永遠的なものだったという「伝説」を生み出す効果を持ちながら、市民的愛と詩的愛の相剋や行き違いのドキュメントでもあった。二人はクンデラの言う「ホモ・センチメンタリス」と呼ぶに相応しいが、それぞれが異なる独自の声を発した「ホモ・センチメンタリス」だったのだ。

散逸の多いヘルダーリンとズゼットの手紙は、主に伝記的事実のための資料として扱われてきたために、その高度な文学性にもかかわらず、それに相応しく読解されてこなかった。手紙文化の文脈から読み解いた例外もあるが（Runge 2004/05）、本発表はとくに感傷主義や手紙のメディア論的效果という観点から読解を行う新たな試みとなる。またそれによって、「新感傷主義」の重要な事例を提供することになるだろう。

2. ノヴァーリスにおける詩的なものとしての手紙

大澤 遼可

本発表は、ドイツ初期ロマン派の作家ノヴァーリスとFr.シュレーゲルとの間で交わされた書簡が心情を書き送ることを目的とした私的な文書のやり取りに留まるものではなく、彼らの詩学や思想を発展させる媒体であり理想的な記述形式の一つであったことを示す。

相互的な触発による思考・理論の強化や発展を理想とした彼らは、Fr.シュレーゲルが「往復書簡は拡大された対話である」と言うように、理論の発展の場として理想的な対話を書簡のやり取りによって実現しようとした。そしてそのような理想を実現した真の手紙こそが「詩的」（poetisch）である、すなわち手紙は単なる伝達手段の一つではなく、それが理想的な文学形式の一つであるとノヴァーリスは書いている。ノヴァーリスによれば彼の文学の目的は「種まき」である。彼にとって手紙とは感情を伝え合う行為であるのみならず、受け手がそれを手に取って読むことでそこに記された思考や理論がさらに発展していく契機を内包した、いわば「種まき」の行為の一つでもあった。

これは感情を伝え合うメディアとしての書簡の位置づけとは異なる観点からの手紙文化へのアプローチである。これによって、合理主義の克服を目指し感情を偏重したという初期ロマン派に対する一面的な解釈を乗り越え、彼らが思考と感情とを完全に切り離すことなく自分たちの文学の発展・強化を目指したことを示し、その主たる媒体として書簡を改めて位置づけることができよう。

3. 「ホモ・センチメンタリス」の実践としての『ゴドヴィ』

高橋 優

「宗教を解放せよ。そうすれば新しい人類が始まるだろう」とFr.シュレーゲルは言う。本発表ではこれをカント的道德からの解放、そして感情の領域への解放と位置付け、「新しい人類」としての「ホモ・センチメンタリス」がクレメンス・ブレンターノの『ゴドヴィ』（1801）において実践

されていることを示す。

『ゴドヴィ』序文においては、本小説が「そこかしこで誤った情感に陥っている」と述べられ、第二部では「官能的でない人間は宗教を持たない」と語られる。シラーにおいて「情感詩人」の根底にあるのは「道徳的衝動」であるが、『ゴドヴィ』においては、もはや道徳は行動規範にならず、官能に根差した情動を価値基準として行動する人物像が描かれる。これはまさにクンデラが「感情を価値に仕立てた人格」と定義する「ホモ・センチメンタリス」像と合致する。ブレンターノは『ゴドヴィ』においてシラーの「情感」を倒錯させ、宗教を道徳から解放し官能と結びつけることで、「新しい人類」としての「ホモ・センチメンタリス」を描いたのである。「新しい人類」像は、書簡体小説を内側から解体し、「神のごとき」語り手になり代わり続きを書く主人公ゴドヴィ(wie Gott)に端的に現れている。カントからシラーを経てブレンターノに至る宗教、道徳及び感情概念の変遷を概観することでブレンターノが提示する「新しい人類」像を明確にする点で、本発表は研究史に新たな視点を提供するものである。

4. 「感情」を通じた自己閉塞的な世界からの脱却

——ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』における「書簡」の役割

橋本 紘樹

『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（1829）の主題は、個人の情感や自己本位的志向を乗り越え、自らの専門的能力に傾注することで、総和としての社会的生活が有意義に営まれる、というものだ。しかしその一方で、各登場人物が「書簡」により自らの「感情」を披瀝しあう場面もまた、全体にわたり描かれている。

ここで重要になるのが、近代経済をめぐる当時の言説である。たとえばアダム・スミスの経済学では、各人の調和的な分業関係だけでなく、実体的なモノと貨幣との対応関係も担保されており、牧歌的で自己完結的な市場が想定されていた。しかし1800年ごろ、イングランド銀行による貨幣の兌換性の制限を一つの機縁として、決定的な変化が生じる。もはや貨幣はモノと結びつかず、それ自体が投資対象となり、自己言及的に増殖するシステムと化するのだ。そしてこの思考の枠組みは、有機体として絶えず自己産出を続ける国家というロマン主義者たちの構想へと通じている（Vogl 2023）。

先行研究では、『遍歴時代』の構想とスミスの諸概念との連関が指摘されてきたものの（Körner u. Sielaff 2002; Fink u. a. 1985; Klingberg 1972）、こうした「知のパラダイム・シフト」は考慮されてこなかった。そしてその際、「書簡」に表現された「感情」もまた、等閑視されてきた。本発表では、経済的变化や同時代言説を視野に収めながら、近代社会の自己閉塞性を打ち破る契機として作品内の「書簡」ないしは「感情」を捉え直すことを試みる。

5. 書簡メディアと愛

——ベッティナー・フォン・アルニム『ゲーテとある子供の往復書簡』をめぐって

白坂 彩乃

『ゲーテとある子供の往復書簡』（1835、以下『ゲーテ書簡』）は、実際に交わされた手紙をそのままの形で収録したものではなく、そこに後年ベッティナー・フォン・アルニムが大きく手を加えて生み出したテキストである。『ゲーテ書簡』にベッティナーの創造的な関与を認める研究は少なからずあるが、本発表では従来あまり取り上げられてこなかった愛の観念に着目し、書簡というディアログ的かつモノログ的なメディアを用いて、ベッティナーがゲーテへの愛を文学的に形象化していることを示す。

ベッティナーの書簡に表れた愛は、クンデラが『不滅』（1990）で語るように、12世紀のトルバドゥールに端を発し、ヨーロッパ文学が繰り返し描いてきた、「ホモ・センチメンタリス」の愛で

あった。愛の対象に触発されながらも、その対象よりも愛することそれ自体による感情の昂揚を求めるこうした志向性は、宛先となる相手はいるものの、対面でのコミュニケーションのような直接性が欠如した書簡メディアによって強化される。こうした愛において女性は客体の側に置かれ、芸術家である男性の作品内で描かれる対象となるのが常だったが、ベッティーナは『ゲーテ書簡』においてその構図を逆転させ、「作者」として自身の愛を演出しているのである。

シンポジウム IV (10:00~13:00)

B会場 (B1 講義室)

トーマス・マン『魔の山』 ——刊行 100 年の「彼方」——

司会：小黒 康正

全体要旨

本企画は、『魔の山』(Der Zauberberg, 1924) 刊行 100 年の記念シンポジウムである。申込者は、日本独文学会 2005 年度秋季研究発表会でシンポジウム「トーマス・マン『魔の山』の「内」と「外」——新たな解釈の試み——」を企画した。今回の企画は、新たな研究動向を踏まえながら、従来の研究について (über) 反省的に考察を深め、『魔の山』100 年の彼方 (über) をめざす。

マンは 1925 年 10 月 30 日のインタビューで『魔の山』について次のように述べている。「私の著作が有する構造的欠陥は、雪の章が結末にないことにあります。上向きになって好ましい例の体験で頂点を迎える代わりに、大筋が下降線をたどるのです」と。マンは 1939 年にアメリカのプリンストン大学で行なった講演でも同様のことを述べている。マンは自作に対する言及が世界文学の中でもおそらく最も多い作家なだけに、マン研究では作者の言説が大きな役割を担ってきた。『魔の山』の場合、自作解説がとりわけ多い。教養小説、二重の意味での「時の小説」、パロディー、「精神の三連星」(ショーペンハウアー、ニーチェ、ヴァーグナー) からの影響、ゲーテ受容、デカダンスの克服など、従来の『魔の山』研究の主たる問題は、マンの自作解説に概ね基づく。

もともと、マンは小説の内外においてかなり饒舌だが、肝心要のところでは何も言わないことも少なくない。饒舌な作家が沈黙する瞬間にこそ、真の「饒舌」があるのではないか。そうした饒舌に聞き耳を立てるときこそ、『魔の山』をめぐる新しい「読み」が立ち上がってくる。それでは、いかなる時に饒舌な「沈黙」が聞こえてくるのか。従来の「読み」では、マン自身の言説に基づき、第六章の「雪」を作品の頂点とみなし、それ以降を「下降線をたどる」箇所としてきた。実際、『魔の山』研究でも、最終章である第七章の考察はペーペルコルン・エピソードを除き比較的少ない。マン自身が「構造的欠陥」という烙印を押した結果である。しかしながら、問題の箇所をめぐる「沈黙」にこそ、聞き耳を立てなければならない。それというのも、マン自身は言葉を控えているものの、大戦前に時代設定された小説の時空に、とりわけ問題箇所に、大戦中の事物や大戦後の思想が織り込まれているからだ。

「構造的欠陥」にこそ饒舌な「沈黙」があるのではないか。本シンポジウムでは、こうした問いを立てて、考察を行う。その際、私たち自身の新たな経験も重視する。私たちのいる世界では、繰り返し新型ウイルスが感染拡大し、各地で戦乱が絶えない。今や私たち自身が病気と死の密封空間におり、いわば「雪山」で「どうどう巡り」をしている。『魔の山』はもはや単なるフィクションではなく、私たちの「現実」に他ならない。こうした観点に基づく本企画は、『魔の山』における黙示録、有機体、認識、非合理性、以上を新たに問い直し、マン自身の言説のみならず、『魔の山』

をめぐる100年の「読み」も超えて行きたい。

1. ペーペルコルン・コンプレックスにおける愛と裏切りの黙示録

鈴木 啓峻

本発表においては、『魔の山』の黙示録的な構造とモチーフにおいて「愛」の問題がどのように関わっているかを明らかにする。第一次世界大戦の勃発という「破局」から「いつか愛が立ち上がるだろうか」という未来への希望を滲ませる言葉で幕を閉じる『魔の山』が、黙示録的な作品であるということが、これまでの研究の中で指摘されてきた。しかし、「終末」から「新生」へというマクロな構図において、ミクロな意味での「愛」の問題がいかに関係するののかについては、これまで十分には論じられてこなかったように思われる。

「終末論」と「愛」の関係についてD. H. ロレンスは、ヨハネの黙示録の起源とその現代的意義について考察した『黙示録』（1930）の中で、集団におけるルサンチマンの発露である終末論的思考を、個人の自発的な「愛」を説く福音書の倫理と鋭く対立するものとして批判した。このように、終末論の問題を「愛」の問題との関連から考えたとき重要性を帯びるのが、ペーペルコルン・エピソードである。彼の物語は、その自死の直前に行われた演説で「ラッパの音」が響いたことから、物語の終局を先取りした「小黙示録」として解釈されてきた。「イエス」「異教の司祭」「ヴァーグナー」など様々な「師」の面影が塗り重ねられたペーペルコルンの人物造形と「弟子」であるハンス・カストルプとの間に展開された「愛」の困難さと可能性に焦点を当てて考察してみたい。

2. 『魔の山』における有機体とフマニテートの関係

小野 二葉

本発表は、トーマス・マン『魔の山』において「有機体」と「フマニテート」がどの程度同一視しうるものなのかを検討する。多くの先行研究は講演『ドイツ共和国について』（1922）を典拠に、マンにおける「有機体」と「フマニテート」を同一視してきた。発表者は2020年の論文の中で、同講演において国家が「有機体」にたとえられ、フマニテートと結びつけられることを確認したうえで、以降のマンにおいては有機体概念とフマニテート概念が分離していくことをも指摘した。本発表はこの問題に「無機物」という観点を導入する。

マンが『魔の山』を執筆する際に参照した生物学研究には、無機物と有機体とを同じ一つの進化の過程におく「一元論」が含まれていた。しかしマンにおいては、無機物と有機体との連続性を強調することは、反フマニテートのとみなされるようになっていったと発表者は考える。小説第六章「雪」の場面が、有機体のたどる生と死の過程を人間の理念へと収斂させている一方で、第七章は死者をよみがえらせようとするオカルト実験を「ひどくうさんなこと」として描いている。生と死の二項対立を止揚する志向と、有機体と「反有機的なもの」との間に線を引こうとする志向とが、この小説においてともにフマニテートと関係づけられていることを、本発表は論証する。

3. 耳を聳する音——雪山、滝、そして戦場

坂本 彩希絵

トーマス・マンによる聴覚的な限界経験への関心は『魔の山』において特に顕著とあってよい。例えば、第四章第五節において、溪流のそばで休息するハンス・カストルプが「耳いっぱい水の水のざわめきを聞きながら」、名状しがたい神秘的な感覚に陥るような現象は、現代の美学者マルティン・ゼールに言わせれば、知覚者がその意味を規定できない、いわば“半”現象ということになるに違いない。それは近代の目的論的認識様式においては周縁的なものであり、それゆえにこそ、そ

れを敢えて知覚しようとする主体にとっては、近代性から自らを解放する契機ともなりうる。

第六章第七節「雪」で意図的に生の限界へと身を晒すカストルプは、「未知の、未聞の、他のどこにも生じたことのない […] 無音」ないし「無言で脅かす原始的なもの」に耳を澄ませることで、ゼールが言う「世界の形成可能性、理解可能性、アクセス可能性の限界」あるいは「自身の、かつて歴史的であり、かつて文化的であった世界の限界」へと挑み、そして第七章第五節では、「間断のない爆音」を立てる滝が「すべての音を飲み込んでしまう」。

『魔の山』において、カント以来の目的論的認識様式の一時的な停止が繰り返し試みられているとすれば、最終節の戦場で、耳を聳する爆撃音のなかへと身体ごと消えていく兵士たちの姿は、そのような認識の無効化の、実存的な不可逆化として読むことができるだろう。

4. 『魔の山』の認識論——戦間期ドイツにおける非合理性と真理

速水 淑子

『魔の山』と非合理主義思潮の関係については、とりわけショーペンハウアーおよびニーチェの影響に注目する諸研究と、フロイトやユングの精神分析の影響を論じる諸研究において、これまでもしばしば論じられてきた。本報告は非合理主義の問題を、真理の探究という認識論的課題として捉え直すことで、マンの認識論を大きな思想史的文脈に位置づけることを目指す。その際とりわけ、第七章のオカルト体験のエピソードと第六章の雪の夢のエピソードの関連を示すことで、認識論の観点から第七章の解釈に寄与したい。

戦間期のドイツ語圏では、人間の理性では捉えきれない非合理的な要素への関心が広く共有されていた。マンは1920年代初頭より、非合理性への関心を正当なものとして認めつつも、それが理性そのものへの敵意へと転化すれば、政治的に危険な帰結をもたらしかねないと警告していた。こうした問題意識は『魔の山』に引き継がれ、ハンス・カストルプの認識論的探究という形で追求される。そこでは、理性の限界を認めつつも真理への接近を断念しない認識のあり方が探られる。作品中では、合理的推論の限界で人間性に関する形而上的な原型について物語るという認識のあり方が示される。報告ではこうした認識論が、同時代にみられた形而上的真理論の一類型であることを示したい。

口頭発表：文学、文化・社会 III (10:00~12:35)

C 会場 (A2 講義室)

司会：富重 純子・村上 浩明

1. ボブロフスキーとクロップシュトック

関口 裕昭

ヨハネス・ボブロフスキー(1917-1965)は、戦後詩人の中でも18世紀ドイツ文学の伝統を受け継いだ詩人として特筆される。とりわけクロップシュトックは特別な存在であり、1965年3月に行われたインタビューでは「私の師匠はクロップシュトックです」と述べ、影響を受けた点として「言葉の活性化、言葉の可能性の探求、韻律の新しい用法」の三つをあげている。しかしその後まもなく亡くなったため、この三点が何をさすのかは明らかにされず、両者のつながりを考察した先行研究もほとんど見当たらない。

本発表では、近年刊行されたふたつの新資料——ボブロフスキーの全書簡集と蔵書カタログ——を駆使して、この秘められた関係を実証的に解明しようと試みる。全体は次の4つの部分から構成

される。

①今年生誕 300 年を迎えるクロップシュトックの生涯と文学的テーマを概観し、ボブロフスキーと比較する。②書簡における言及や蔵書への書き込みからうかがえるクロップシュトックへの関心のありかを紹介する。③それを先にあげた三つの視点——本発表ではこれを「造語や現在分詞などの用法」、「詩的形象の多様性」、「伝統的韻律から自由韻律への変化」ととらえ直す——から分析する。特に「春の祝祭」とボブロフスキーの幾つかの詩を比較し、独自の語法と韻律、「河」、「虹」等のモチーフがどのように取り入れられたのかを考察する。④最後にボブロフスキーの代表詩 *An Klopstock* を新しい視点から解釈し、サルマチア詩編の構想全体へのクロップシュトックの位置を呈示したい。

2. イェリネク作/シュテーマン演出『ウルリケ・メアリー・ステュアート』における 哀悼劇および悲歌としての特性

高橋 慎也

この舞台は、ドイツ赤軍女性幹部のウルリケ・マインホフとグドルン・エンスリンのライバル関係を、シラー作『メアリー・ステュアート』におけるメアリー・ステュアートとエリザベス I 世のライバル関係に重ね合わせ、男性支配社会の中で闘争する女性同士の対立と孤立、マスメディアによる女性戦士のアイドル化とステレオタイプ化などを批判的に提示している。シュテーマン演出の舞台は、イェリネクとシュトレルヴィッツの対談を『ヴァギナ・モノログ』として追加するなど、戯曲を素材として再構成したポストドラマ演劇としての特性を有している。

戯曲に関する先行研究では主に、男性支配批判、マスメディア批判、伝統的戯曲形式批判といった批判性や挑発性に焦点を当てている。また演出については戯曲の素材化といったポストドラマ性に焦点を当てている。

イェリネクはウルリケとマインホフを「イデオロギーの所産」と捉え、「私」という主体を持たない女性として描いている。他方ではテロ行為に疲れ、内部抗争に敗れて自殺するマインホフに、作者が「私＝私たち」として共感していると解釈できるセリフをも挿入している。シュテーマンは、自己分裂し死に至るマインホフとメアリー・ステュアートの悲喜劇性を、同じ状況を共有する自らの世代の悲喜劇に重ね合わせて演出している。

以上を踏まえるとこの戯曲と舞台は哀悼劇および悲歌としての特性をも併せ持っていることが解釈することができる。

3. 戦後復興の欺瞞と混乱——ニコラス・ボルン『二日目』における社会批判と人物造形 杵渕 博樹

ニコラス・ボルンの第一小説『二日目』(1965)は、ヌーボー・ロマンや新リアリズム、新主観主義などとの関連で、主に、その実験的手法から論じられてきたが、本発表では、語り手以外の人物の造形に注目し、本作に見られる同時代社会批判の思想的特質について考察する。

語り手は、列車の中で偶然知り合った青年夫婦に招待され、彼らの郊外の邸宅で一泊する。自身の貧しい生い立ちと貧しい現状とを自覚する語り手に対し、招待主ジークフリートは戦後の混乱の中でビジネスを成功させた新富裕層である。しかし、民主主義と基本権を巡る議論に際しては曖昧な態度を示し、湖での水泳競争ではこともなげに卑怯な振る舞いを見せたかと思うと、突如として同性愛的接触に及び、語り手を戸惑わせる。この印象的人物は、その歓待と裏切りと誘惑によって資本主義社会を象徴しつつ、西ドイツの戦後復興の欺瞞と混乱を体現する存在となる。

また、湖へ向かう道中で森の上空に現れる「スポーツ飛行機」を契機に、語り手が想像の中でジークフリートに語らせる奇妙なエピソードは、文脈からして成功者の〈苦労話〉かつ〈自慢話〉でなければならないはずなのだが、スタイルとしては抽象的な寓話であり、それが描く、個別の主体

言及されていない「年齢」が新たな要素として関与していることを示唆している。

一方で、類似現象が観察されるドイツ西部・南部の諸方言では、蔑視的意味や女性名に専ら使用される指小辞の影響が生起要因とされることが多い (cf. Christen and Baumgartner 2021:181; Nübling, Busley, and Drenda 2013:161–62)。しかし、ヴィラモヴィアン語では人名に付与される指小辞の使用頻度に男女差が見られないため、この要因以外での説明が必要である。そこで、「女性」、「親密性が高い」、「年齢が若い」という特徴を持つ中性名詞 *mákja*「少女」が、他の女性名詞にも影響を与えたと推察し、これが不一致現象の主要な生起要因であることを主張する。

2. 長・短か？ 張り・緩みか？

——ドイツ語基本母音の非強勢位置での音節的振舞いに着目して

藤縄 康弘

ドイツ語基本母音の長・短はたいいて張り・緩みの差も伴う ([i:] *Miete* – [ɪ] *Mitte*, [u:] *Buße* – [ʊ] *Busse*, …)。この2種類の差異のうち、どちらがより本質的なものであるかは、絶えず議論されて来たが、いまだに見解は割れている。この間、①「長・短から張り・緩みが帰結する」(Trubetzkoy 1939, Noack 2016 など)と、②「張り・緩みから長短が帰結する」(Vennemann 1991, Eisenberg 2006 など)という正反対の立場が対峙しているが、いずれにも短所があり、調音特徴の一方の次元を他方の次元に全面的に還元する試みは成功していない。

こうした中、本発表は、これまでどちらの立場からも看過されて来た、母音の非強勢位置における音節的な振舞いに注目することで、少なくとも標準的な変種においては、長・短と張り・緩みが二者択一的ではなく共存していることを示す。主たる根拠は次のとおりである：強勢位置において長・短と張り・緩みの両次元で異なる母音は、非強勢位置に現れると、ともに短く実現されるが、張り・緩みはなお維持され、緊張母音もつばら開音節に現れる ([i] *Chi-né-se* – [ɪ] *In-te-rés-se*)。これに対し、張り・緩みの対立が疑われる [a:] と [a] は、非強勢位置でも、双方が長・短を保ったまま開音節をなし得る。しかも、弱い [a] が強勢の前にも後ろにも現れるのに (*Ä-tóm*, *Mó-na-te*)、弱い [a:] は強勢の後ろにしか現れない (*héi-ra-ten*)。最後に、開音節をなし得る [ɛ:] (*Äh-re*) は、そもそも強勢位置にしか生じない。このため、この母音は [a:] と並んで音素的に長い非緊張母音が強勢に鑑みて (より一層) 分布を制限されているケースと捉えられる。

3. gut と schön の評価要因の相違について

信國 萌

ドイツ語形容詞 *gut*, *schön* はともに対象に関する肯定的な評価を表すが、両者は同じ統語的環境に現れていても、その意味的な評価対象が異なることがある。例えば *guter/schöner Tänzer* について、前者は「踊り」に対する評価を、後者は「ダンサーそのもの」に対する評価を表すと解釈されやすい (Geuder (2000), Egg (2006))。本発表では、このような意味解釈の違いが何に起因するかを、コーパスから収集した事例をもとに考察する。

コーパスの事例を観察すると、形容詞 *gut* が人を表す名詞と結びつく際には、それが動作主名詞ではない場合にも、その人が行う動作が文脈上明らかであることが少なくない。また、*gut* は *schön* よりも比較・最上級で用いられることが多い。このような調査結果をもとに、本発表では上述の解釈の異なりを以下のように説明することを試みる：*gut* が対象との何らかの関連を考慮して評価を与える形容詞であるのに対し、*schön* は対象に直接的に評価を与える形容詞である。つまり、*gut* は肯定的な評価を表すために、その要因を別途求める。*guter/schöner Tänzer* に関していえば、前者では *Tänzer* が *tanzen* することにより肯定的な評価を与えられるが、後者は *Tänzer* の存在そのものに肯

定的な評価を与えられているのである。

この説明は Fechner (1876) の美学的な基準を参考にしてはいるが、言語学的にはおよそ Quirk et al. (1972)のいう non-inherent/inherent adjective の違いに相当する。多くの形容詞は両方の用法を持つとされるが、本発表では、gut, schön において根本的な意味の違いとして、non-inherent/inherent の解釈の異なりがあると考える。

4. deutsch なる語の起源についての再考察

荻野 歳平

本発表で取り上げるテーマ「deutsch なる語の起源」については、周知の通り、長い研究の歴史がある。それは、これがとりもなおさずドイツ人の民族的アイデンティティの根幹に深くかかわる問題だからである。

ところで、その長い研究史においては、約 100 年以上の長きにわたって継承されてきた一つの「定説」が認められる。それは、18 世紀後半の Herder に始まり、Jacob Grimm によって基礎づけられ、やがて 20 世紀になると Weisgerber によって完成を見るに至る一連の系譜のことを指す。それによると、deutsch なる語は、もとをたどればゲルマン語に由来すること、しかもそれは Volk の中から「内発的」に生まれたものであって、いわば Deutschtum (ドイツ的なるもの) の顕現であるとするものであった。

一方、そのような定説に対しては、戦後の特に 1970 年以降になると、それを批判する、あるいは真向から否定するような諸提案が次々となされている。それによれば、deutsch (theodiscus) なる語は、ローマ教皇権と対抗するために、フランク王権上層部によって導入された概念であると主張され、これまでとは反対に「上(外)から」の起源説が提唱されたのであった。

このように「deutsch の起源」についての論争は、今なお未決着の状態にあるといわざるをえないわけだが、本発表では、先行研究に依拠しながら、これら二つの仮説が抱えるいくつかの問題点を議論の諸前提にまで立ち戻って整理し直し、今後の研究の課題とその方向性について論じる。

5. Didaktisierung von Mehrwortausdrücken in der Fremdsprachenvermittlung Deutsch als Fremdsprache

Maria Gabriela Schmidt

Mehrwortausdrücke machen einen großen Teil unseres Wortschatzes aus und bilden die Grundlage für Redemittel und Kommunikation. Sie lassen sich in fast allen Sprachen finden, z. B. *ein bisschen*, *a little bit*, *un peu*, *zu Hause*, jap. *ni-do-to* um einige einfache Beispiele zu nennen. Dazu gehören ebenso Kollokationen, Funktionsverbgefüge und Redewendungen. Dennoch findet dieser Gegenstand wenig Beachtung in der Fremdsprachenvermittlung, sowohl in den Lehrmitteln als auch in der Unterrichtspraxis, insbesondere im Anfängerbereich. Seit einiger Zeit werden *Chunks* (Redeversatzstücke), wie z. B. „Ich hätte gern ...“, „Können Sie bitte mal ...“, als hilfreich diskutiert. Sprache besteht aus Verbindungen von Wörtern, die sich durch den Gebrauch etablieren. Lernende konzentrieren sich zunächst auf einzelne Wörter und die grammatischen Regeln. Dass Wörter gemeinsam auftreten, eine Beziehung zueinander haben und eine Bedeutung damit konstituieren können, sollte im Fremdsprachenunterricht stärker betont und in die Lehre einbezogen werden. Dazu sind Strategien zur Bewusstmachung hilfreich, die bei der eigenen Sprache (z. B. Japanisch) und bei einer bereits erlernten Sprachen (z. B. Englisch) beginnen können. Eine Sensibilisierung kann im nächsten Schritt dabei helfen, zusammenhängende Mehrwortausdrücke in der Zielsprache Deutsch Schritt für Schritt zu entdecken. In der Linguistik finden sich zunehmend Studien zum Sprachgebrauch. Für den Bereich Deutsch als Fremdsprache sind dies Studien u. a. von Karin Aguado

oder Annelies Häcki Buhofer. Der Vortrag wird auf die Forschungsliteratur (sowohl Linguistik und als auch Fremdsprachendidaktik) im Hinblick auf Mehrwortausdrücke und Chunks eingehen, eine Analyse von ausgewählten Lehrwerken zu Deutsch als Fremdsprache vorlegen, um die Notwendigkeit argumentativ und exemplarisch darzulegen, warum es sinnvoll ist, im Unterricht Mehrwortausdrücke einzubeziehen. Es werden didaktisierte Materialien vorgelegt und zur Diskussion gestellt.

ブース発表 I (10:00~11:30)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

E 会場 (B2 講義室)

日本とドイツにおける文化多様性について——無形文化遺産をもとに

金城ハウプトマン朱美

「無形文化遺産の保護に関する条約」(無形文化遺産保護条約)は2003年10月にユネスコ総会で採択され、「人類の無形文化遺産代表的な一覧表」(代表一覧表)がユネスコで作成されている。日本は2004年にドイツは2013年に本条約を締結した。両国の無形文化遺産に対する取り組みの違いは、締結時期にも登録されている文化財の特徴にも表れている。無形文化遺産に登録された文化遺産の数をみると、日本の数の方が圧倒的に多い。ドイツから代表一覧表に登録された無形文化遺産は、古くから継承されてきた伝統工芸技術もあれば、鷹匠といった自然及び万物に関する知識及び慣習、協同組合といった社会的慣習もある。ドイツユネスコ国内委員会は、無形文化遺産を通じて、ドイツ文化と社会の多様性をアピールしようとし、持続可能な社会の実現に向かっている。ドイツの無形文化遺産に関する研究は国内外でも多くない。

本発表では、ドイツにおける無形文化遺産と日本の無形文化遺産を研究対象とし、それらの特徴を抽出して、さまざまな角度から日独の文化多様性について考察すること、無形文化遺産からみえるドイツと日本の特徴を明らかにすることを目標とする。無形文化遺産研究に関して、今後どのような可能性があるのか、どのような展開になりそうなのかなどについても、参加者と討議したい。

ブース発表 II (11:30~13:00)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

E 会場 (B2 講義室)

ドイツ語現代詩の朗読の分析：音声学と文学研究からのアプローチ

生駒 美喜・小野寺 賢一

本研究は現代詩の朗読音声に注目し、多和田葉子のドイツ語詩の著者自身による朗読を対象に、現代詩の表現とリズムやポーズなどの音声特徴がどのように関わっているのか、音声学と文学研究の両観点からの分析を試みる。

話しことばにはリズムやポーズなどの音声特徴が含まれており、話者の様々な発話意図や感情を表す。詩の朗読音声に関する研究では、これまで主として韻文の朗読における音声特徴が散文との比較において扱われてきた。一方、現代詩の朗読には固定の韻律や押韻が見られず、散文の朗読と類似していることが指摘されているが、現代詩の朗読を対象とした音声学的分析はこれまでほとんどなされていない。

そこで本発表では、現代詩として多和田葉子の詩の朗読音声に着目し、音声学的観点からの分析を行うと同時に、現代詩の朗読における音声特徴が著者の主張や意図とどのように関係するのか、

文学的観点からの分析を試みる。多和田葉子は常にドイツ語と日本語の言語の境を意識した作品作りを行っていることから、多和田自身のドイツ語詩の朗読音声には、ドイツ語としての音声特徴が含まれると同時に、日本語としての音声特徴が含まれるとも仮定できる。

本発表では、Lyrikline (<https://www.lyrikline.org/de/startseite/>) に公開されている多和田葉子の詩の朗読音声を、ドイツ語母語話者による朗読音声との比較において分析した結果に基づき、朗読音声にみられる音声特徴が著者の表現や主張とどのように結びつくのか、フロアも交えて討論を行う。